

○小谷 真樹 氏（平成 24 年、娘（当時 7 歳）を交通事故で失う）

[要旨]

事件の概要

平成 24 年 4 月 23 日、京都府亀岡市で、集団登校中の児童たちの列に、背後から軽自動車が進み、児童 9 人と付き添いの保護者 1 人を死傷させるという事件が起こりました。

その約 5 時間後、次女の真緒(当時 7 歳)がこの世を去りました。また、付き添っていた保護者の妊婦とお腹の中にいた胎児もその日に命を奪われました。そして事件から 5 日後には、重体だった小学 3 年生の女の子もこの世を去りました。他の児童ら 8 人も重軽傷を負い、それぞれ病院に搬送されました。その 8 人のうちの 1 人に、小学 3 年生だった長女(当時 8 歳)もいました。

車を運転していたのは、未成年者(当時 18 歳)で、運転免許を 1 度も取得したことがない無免許運転の常習者でした。同乗していた 2 人も無免許、車を貸していた免許所有者は同乗していませんでした。そんな身勝手な行動が、なんの非もない子どもの命を奪い、幼い子どもたちに恐怖を与え、私たちの人生を崩壊させました。

長女について

事件発生時、私は仕事に出ており、現場にすぐに駆けつけることができませんでした。後々、駆けつけた方々から話を聞いて、当時の現場の状況を知りました。花壇の花はなぎ倒され、痛いと言っている子や、血を流し、意識を失い、倒れ込んでいる子がいたそうです。幸いにも軽傷で済んだ子どもたちは、逆に意識がはっきりしていたために、その恐ろしい現場を見た子もいました。

長女は、顔や腰あたりの擦過傷で助かりました。軽傷なので、もしかしたら現場を見たのではと今でも思いますが、長女自身は今でも、事件直後の記憶がない、妹を探したけれど見当たらなかったと言っています。そうあってほしいと願っています。

被害にあった中でも、次女が一番外傷がひどい状態でした。搬送された病院で見た私でさえ、本当にパニックになるような状態でした。長女は、次女とは 1 歳違いで、本当に仲良くしてくれて、毎日一緒に学校から帰ってきて、共通の友達と遊ぶのもどこに行くのも一緒でしたので、長女には、妹のそんな姿は見てほしくないと思っています。ただ、二人が倒れ込んでいた現場もすぐ隣で、現場に駆けつけた祖父母が言うには、長女はその時は意識があったそうです。次女は既に搬送されていたのですが、長女が次女の姿を見ていてもおかしくない状況だったというのは、今でも気にかかっています。

事件 10 日後くらいには長女は学校に復帰しましたが、長女自身が被害に遭ったこともあったと思うのですが、妹と一緒に毎日歩いて集団登校していただけない、学校に歩いて行くことに対して、ものすごく抵抗が出てきました。

事件直後は、学校も地域も、通学路に見守りをたくさん配置して、学校全体の児童をサポートするという対策はされていたのですが、そんな中でも、長女は歩いて行くのは無理だと言いました。そこで1学期中は、祖父母に車で送迎してもらっていたのですが、それだと、長女が今後ずっと歩いて行けなくなるのではないかという思いが出てきました。また、学校や地域の方も、2学期が始まる頃には付添いや立ち会いを無くすことが決まり、「子どもたちが自分で歩ける学校作り」が進められました。そうすると、長女にとっては、ますます厳しい現実になりました。

私は、長女自身が歩いて学校に行けるようになることを願って、長女と話し合いました。長女は、「大人と一緒に歩いてくれるんやったら、なんとか頑張っていく」と言ったので、私はその言葉をうれしく受け止め、迷いもありましたが、仕事を辞めて子どもの付添いをすることに決心しました。今になって、その言葉は、長女にとってはものすごく勇気を振り絞って言ったことなのか、それとも私を喜ばせようと思って言った強がりだったのかもしれないと思います。

最初は緊急会議といって集まったり、見守りしていた学校も地域も、4か月、5か月经っていくにつれ、何もなかったかのようにになっている現実に対して、私は、「人ごとなんやな」と怒りを感じている時でした。そんな時、私が毎日子どもに付き添って学校に通っている姿を見た近所の方が声を掛けてくださり、娘の状況と付き添っている理由を話すと、「じゃあ、私たち何人かでお嬢さんの付添いをするわ。こんなことしかできひんけど、こんなんでも小谷さんの助けになるんやったら」と、すぐに仲のいい方たちで連絡を取り合って、毎日当番で長女に付き添える体制を作ってくださいました。そうして、その後約半年間、付添いをしてくださいました。

その時学校側には、再度、協力を求めたのですが、受け入れてもらえませんでした。学校としては、他にもまだ通えない児童はいたので、個別の家庭への対応まで手が回らなかったのだらうと思います。

現在、長女は中学3年生ですが、当初、そういった周りの方々のおかげで、今は学校にはもちろん自分の足で行けるようになっていきますし、当初は外に遊びにすらも行けなかったのですが、元気に遊びに出て行っています。

学校との関わり、学校に望むこと

亡くなった次女の妹は、当時、保育園の年長さんで、その次の年には小学校に上がりました。小学校に上がると、事件を分かっていない子どもたちがたくさんいる新しいクラスで、自己紹介をしなくてはなりません。これは中学に進級した長女も同じことを言っていたのですが、自分にきょうだい何人いるという話を、どうしていいかわからない、と。親としては、隠さんと言ったらええ、という思いはありましたが、それが言えないということも理解していたつもりでしたので、本当に、なんと娘に答えていいのかわかりませんでした。

学校でのことで子どもが苦しんでいるということは、子どもから言われるまで分かりませんでした。だからこそ、そういった場面で、子どもに対して細かい面でのサポートをしっかりとできるような学校であってほしいと思います。

学校にはスクールカウンセラーもたくさん来られ、体制はできていたようですが、長女が心を開いていたのはあくまでも担任の先生のみでした。「あの人はあんまり知らんし、しゃべりたくない」と、スクールカウンセラーを信用していなかったのか、担任の先生にしか話ができないということでした。

担任の先生は、スクールカウンセラーと相談をして、頻繁に私に連絡をくれていました。社会の授業で、事故や事件、警察などに関連する絵や写真が教科書に掲載されている場合は、先生がわざわざ家まで来て、これは大丈夫か、授業には出席できるかなどの相談をしてくれました。学校として、ある程度は気を遣ってくれていることは感じていました。

それと、学校の行事についてですが、娘が通っている学校は、卒業式で、卒業生を5年生が見送るセレモニーを行っています。長女からすれば、見送ってくれる側に妹がいないということで、「卒業式に出るのがしんどい」と言ったことを覚えています。やはり卒業式は、先生からすれば華やかで、「おめでとう」と言って送り出す場面だと思いますし、親としても長女に対して「おめでとう」と言っていました。しかし、後で長女に「いや、真緒ちゃんがいいひんし、悲しいんや」と言われた時に、「ああ、なんてことを言ってしまうてるんや、なんで理解できてへんのや」とものすごく反省しました。学校には、行事に関しても、きょうだいを亡くした、親を亡くした子どもたちの、そういうなかなか見えない、気づきにくい気持ちの揺れがある面に対して、しっかりとしたサポートを考えてもらえるとうり難いです。

子どもに関わる支援制度の充実を

加害者の公判への参加、同乗していた少年に対しては傍聴で、全ての裁判を見に行きました。多い時には、週1回のペースで行きました。その時一番困ったことが、その日の子どもたちの受入れ先が無いということです。普段は、祖母が子どもたちが帰ってくるのを待って世話をしていたのですが、祖母も、孫の命を奪った相手の裁判を見に行きたいという思いがありましたので、当初は、近所の方に子どもを受入れをお願いして、大人は裁判に行っていました。ですが、回数が重なるにつれ、近所の方に申し訳ないという思いも積もり、その後は、祖母が子どもたちが学校から帰ってくるのを受入れるようにしました。

当時私には、学童とか延長保育に対して手続きが難しいものという思い込みもあり、学校や行政に相談していませんでした。また、相談できる支援機関があることも知りませんでした。今、既に制度としてあるのかもしれませんが、裁判の日だけでも子どもを受入れをしてもらえるような体制が充実

されることを望みます。そして、それに対しての費用を免除してもらえそうな制度があればいいと思います。また、そのような支援の提案や情報提供を、学校や行政側からしてもらえるようになることを願います。

子どもたちを支えるものとは

私自身に心の変化があったというか、事件前よりももっと子どもといる時間を大切にしなければダメだと思っています。もしかすると、子どもからすると言えていないことはたくさんあるのかもしれませんが、私自身は、子どもと距離を近く持つようにしています。事件のことに対しても、加害者のことに対しても、それが良いか悪いか分かりませんが、子どもたちが気になっている素振りや口ぶりをしたら、包み隠さず話すようにしています。もしかしたら、ショックを与えることになるかもしれませんが、隠すよりも、子どもと距離を近づけることができる方法だと思っています。

今、学校でも、事件のあった4月23日には、毎年全校集会を開いて、校長先生が話をしたり、みんなで花を植えたりと事件を語り継ぐ取組をしています。ただ、現在小学6年生の三女は、「誰も事件のことを分かってくれていない。私とその事件の妹やっていうことも分かってもらえないのが寂しい」と言います。自分から言ったら、と言っても、「お姉ちゃんいいひんやん、うそつきやん」と言われるのが怖いと言います。もちろん親としてサポートしなくてはなりませんが、学校での出来事に関してなかなか目が行き届かないのが正直なところです。やはり学校側で、決して特別扱いでなくていいので、子どもに対して、しっかり目を向けてもらえたらと思います。

長女の一番の支えは、やはり友達です。事件後、学校に復帰し始めた時から、友達は今までと何も変わらない態度で、「遊ぼう！」と家に呼びに来てくれたり、本人が引きこもりがちになっても、無理やりでも連れて行くような感じで何回も家に来て引っ張り出してくれました。もしかしたら、長女にすれば少し精神的にはしんどかったかもしれませんが、でもそれが、今の長女にとってはものすごくよかったと、私自身は感じています。本当に、周りの友達には感謝しています。

今日、私自身が「親」という立場で来ており、「子ども」の立場で家族を亡くした心境について、まだまだ本当は理解できていないと思っています。ただ、「親という立場で何が必要ですか」という面からの質問に対しては、何でも答えていきたいと思っています。